

リソースの発想とカウンセラーの態度

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

スクールカウンセラー（以下SC）の重要な仕事である講演活動は、先生と子どもたちが織りなす教育が円滑に展開されるよう側面から支援するのが目的と前回述べた。

あくまで、学校は児童生徒と先生が主役で、SCは黒子に徹するのが望まれる姿である。これは、SC以外のあらゆるカウンセリング場面においても、基本的態度といつてよいであろう。それは、カウンセリングと親和性の高い教育の世界でもいえる場面が少なくない。

私はテニスとスキーを長く続け、その過程でいろいろなコーチの教授法に触れる機会を得た。その中から、コーチのタイプに大きく分けて2種類あるなと感じている。

1つは、自分の信じる理論を元に、その信念の枠組に沿って教えるタイプ。2つ目は、個々の教え子の長を理解し、その準拠を見つければ、その基準に沿って育てるタイプだ。

この後者のコーチは、なかなか教えてくれないし、最初は不親切な感じがする。一方、自分の理論を信念として教えてくれる最初のタイプは、初めから情熱をもっていろいろなエキスを伝授してくれ、頼もしくも感じたりしたものだ。

しかし、自分の不備なところを彼が信じる理想のフォームからいろいろ指摘されるので、聞いているうちに辛くなり、スイングも縮こまったりして、しまいにはどう打ったらよいかさっぱりわからなくなって自信を失ったこともあった。

一方、2番目タイプのコーチは、左利きである私のメリットやフォームの特徴、さらにうまく打っている箇所などをぼつりぼつりと明らかにしてくれた。自分らしくプレーすればいいのだという思いを強くし、上達するために今の自分の課題は何か、私のフォームの観察や話し合いの中から明確化してくれ、練習テーマに気づかせてくれたりもした。

最初のタイプは、コーチや理論が主役といえる。それを基準に教え子の不足不備な点を指摘するので、裁か

れる構造といってもよいだろう。この教授法は教育やカウンセリングからは遠いものといえる。教師やカウンセラーは、裁判官ではないからだ。

反対に、2番目の教え方は、あくまで教え子が主役で、コーチは脇役に徹している。

特にカウンセリングでは、価値観の押しつけになってしまうと、その面談はお説教になってしまう。そうなれば、ラポールはつけられず、表面的にはお礼を述べて去っても、わかってもらえなかった傷心の相談者は、もう二度と来談されることはないだろう。

以前、中野サンプラザ相談センターで青少年職業カウンセラーを務めていた頃、時々民間の人材派遣会社から傷ついて来所される若い人たちが見られた。よく聞いてみると、人材ではないと登録を拒否されたというのである。その都度強い憤りを感じたものだ。

派遣会社も商売なのでいたしかたないところかもしれないが、登録を拒否したい人こそ支援が必要で、個人内差としての得手強み（リソース）に焦点を当て、職業まで高めていく視点と発想が何よりカウンセラーの基本的態度として重要である。それは、一般的にまずいと見なされる来談者の個性を、単に欠点と見るのではなく長所としても捉えられるリフレーミング的認知ができるか等も、重要なカウンセラーの態度といえる。

スクールカウンセラーも同じで、児童生徒のカウンセリングや先生へのコンサルテーションでは、児童生徒や先生がすでに潜在所有しているもの（これをリソースと呼ぶ）に気づかせ、それを現場で効果的に発揮できるように働きかけることが重要な職務になる。今の自分が持っているさまざまな資質（無いものでなく有るもの）に注目し、それをさらに発揮し伸ばそうとする考え方だ。

欧米風的能力主義やリストラを安易に導入した結果、働き手が道具化し、人間関係や雰囲気も殺伐とし、OJTもさび付き、チームワークを大切にしながら伝承し育てるといった良き日本組織の風土が失われつつある今こそ、持つべき発想といえるだろう。